2020年度経済地理学会名誉会員候補者
藤田佳久会員

名誉会員推薦理由

藤田佳久会員は，日本の山村と林野利用の研究を中心に，古文書・フィールド調査などによる膨大な事実の蓄積と，地理学とともに隣接科学の理論・成果も駆使し，重層的で体系的な論考により特に顕著な成果をあげた．これらは地理学にとどまらず，関連の学界でも注目され，経済地理学の評価を高めることに貢献した．以下，限られた紙面であるが，同会員の功績を述べる．

第一は日本の山村の特質についての研究である．山村の概念規定，社会的空白地域論や多くの個別の山村の事例研究（『日本の山村』地人書房1981，「社会的空白地域」地理科学1988），『日本の山村の変容と整備論』地人書房1998）など）は，日本の山村研究の土台となり，自らも山村地域のさらに深い論考へと発展させた（『奥三河山村の形成と林野』名著出版1992，『花祭り論』岩田書院1997など）．

第二は育成林業地域論を中心とする研究である．林業経済学も取り入れた育成林の概念を元にして，全国各地での林業地域形成の研究を進めた（『日本・育成林業地域形成論』古今書院1995など）．さらに育成林業地域論は入会林野と林野所有の問題へと深く掘り下げられ発展した（『吉野林業地帯』古今書院1998，「入会林野と林野所有をめぐって」人文地理1977など）．さらに幕末期と明治中期の林野利用を復元したメッシュ地図（『アトラス−日本列島の環境変化−』朝倉書店1995）は同会員だけがなし得た膨大な作業の成果であり，行政，建設業界からも大きな反響を得た．

第三は上記の理論的・実証的な研究を基礎にした山村政策論（編著『山村政策の展開と山村の変容』原書房2011など），地域史・誌（共編著『日本の地誌7 中部圏』朝倉書店2007，多くの自治体史，「奥三河星座論」愛知大学文学論叢，1995など），災害論などである．同会員は多くの各種審議会委員も務め，貴重な知見は自治体行政現場でも活かされた．

第四は勤務校・愛知大学の前身『東亜同文書院』の研究であり，近代日中間関係史の主軸の一つに同書院の存在があることを示した（『東亜同文書院−中国大調査旅行の研究−』大明堂2000，『東亜同文書院生が記録した近代中国の地域像』ナカニシヤ出版2011など）．

藤田会員は1940年豊橋市に生まれ，名古屋大学大学院文学研究科博士課程中退後，奈良大学文学部，愛知大学文学部で研究・教育に従事し，多くの有為な人材も育てた．2011年に定年退職し，愛知大学名誉教授の称号を授与された．本学会には1963年に入会し，評議員7期，中部支部長4期，中部支部代表幹事2期を務め，学会運営に多大な貢献をなしている．

以上のように，藤田佳久会員が経済地理学研究および本学会に寄与した特筆すべき功績は名誉会員にふさわしく，ここに名誉会員として推薦する．

名誉会員推薦委員会

松原　宏（委員長），伊藤健司，鍬塚賢太郎，近藤章夫，末吉健治，土屋　純，根岸裕孝，宮地忠幸